《最優秀賞》

全力の大切さ

南中学校３年　滝澤（たきざわ）　愛海（まなみ）

「一生懸命頑張ることは大切です。努力は必ず報われます。」

そんな話を聞く度に、本当にそうなのかなあ。と冷めた目でみてしまう自分がいました。二年前、中学に入学した夢いっぱいの私を待っていたのはコロナ禍で次々と行事が中止になった現実でした。体育祭は規模を縮小して学年ごとに開催し、音楽会は中止、何より楽しみに準備していたスキー教室もなくなりました。

「中学校は、行事がたくさんあって、みんな一生懸命になるから楽しいよ。」先輩にそんな話を聞いていたので、様々な行事が行えないことが、悔しくて、悔しくて本当に悲しかったです。悲しみはやがて「どうせ一生懸命やっても、中止になってしまうのなら練習するだけ無駄なのではないだろうか」という考えに行き着きました。

いつのまにか、傷つくのを恐れ、何事にも全力で取り組めない無気力な自分がいました。

「一生懸命やる意味はあるのか。」私はこの答えを今年、見つけることができました。

私は運動が苦手です。体育の授業や体育祭は気が重く、特にクラス全員で走るリレーや全員が協力して行う学年種目は憂鬱の種でした。個人競技ならまだしも、全員でする競技は皆に迷惑がかかってしまうことが嫌でした。「自分さえいなければ、勝てるのでは。みんなに迷惑がかかるのは嫌だ。」足手まといな私は、いつも仲間へ申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

その気持ちが変わったのが三年生として最後になる今年の体育祭でした。

「大ムカデ」は全員の足を縄でつなぎ、四十人が一列になってゴールまで向かう競技です。初めはリズムが合わず足を引っ張られては何度も転んでしまいゴールまでたどり着くことができませんでした。「どうせまたできない、練習してもうまくなんてならない。」そんな私に毎日つきあって練習してくれたのは、クラスの仲間、転んでも「大丈夫！いけるよ。自分を信じて。」と勇気づけてくれる仲間たちでした。

「仲間」という言葉の意味を辞書で調べると「一緒に物事をする間柄」という意味が出てきました。「一緒に何かする」その言葉には収まりきらないほどたくさんの意味が込められていると今は感じています。一人ではがんばれないけれど、信じてくれる仲間がいるからがんばろう、もっと変わりたいと強く願い行動することができたのです。

太宰治の「走れメロス」に「信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題ではないのだ。」という言葉があります。この本を読んだ時は随分大げさだと感じて共感できませんでした。ただ、今なら分かります。私を信じてあきらめないでいてくれる仲間がいる。そのことが勇気となり、結果にこだわってびくびくしていた自分から、勝利よりももっと大切なもののために全力を尽くしたいと思える自分になりました。

それでも結果が出ず落ち込んでいる私たちを担任の先生が「全てに全力で。たとえ運動が苦手でも、全力でぶつかれば、勝っても負けても必ず自分の力になる。」と応援してくれました。人の目が気になりすぎて自分自身と向き合えていなかった私は、全力でやれば相手は気にならない、すぐにあきらめてしまう弱い自分との戦いなのだと気が付くことができました。そして、練習から全力で努力すれば相手や結果は気にならないと感じるようになりました。すると、いつも感じていたもやもやしていた気持ちがなくなり、清々しい気持ちでいっぱいなりました

そして本番当日、いつもは他人事で喜べなかった優勝もクラスの一員として仲間と感動を分かち合うことができました。体育祭を通して、学んだことは、全力で物事に取り組む大切さと自分を信じることです。

もし自分なんてと弱気になっている誰かがいたら伝えたい。「全力で頑張ることは大切です。努力は必ず報われます。あなたを信じて待っている仲間が必ずいます。」

《優秀賞》

“見えない力”に感謝

花園中学校３年　本多（ほんだ）　理珠（りみ）

普段、私が手にしているペンは、メイド・イン・チャイナ。消しゴムやノリは、メイド・イン・ベトナム。他にも、今着ている服は、メイド・イン・タイランド。上履きは、メイド・イン・ジャパン。身の回りのものがどこで作られたものかを調べてみると、日本製もありますが、多くのものが外国製であることが分かります。行ったこともない国、会ったこともない人、私とは全く接点のない場所で生活している人がもの作りをしていて、そのおかげで、私は今、不自由なく生活しています。

よくよく考えてみると、毎日の食事も、見ず知らずの方々のおかげです。例えば、花園中学校の給食を例に考えます。花園中学校の給食では一週間のうち３回お米が出ます。そのお米が私の口に入るまでには、お米を炊いてくださった調理員さん、お米を学校まで運んでくださった配送トラックの運転手さん、お米を販売してくださった小売業の方。お米を作ってくださった農家さんなど、様々な方のおかげでおいしくお米をいただいています。しかし、給食のご飯に関わる方々のことを、私は誰一人として知りません。顔も、名前も、どこに住んでいる方なのかも。出会うこともほとんどないでしょう。

そう考えると、地球上のありとあらゆる人が互いに支えあって生きているということが分かります。

―私が、今、生きている―

そのために、何人の方の“見えない力”が働いているのでしょう。

間もなく終わる中学校生活を振り返ると、今まで大きな不自由を感じたことはありませんでした。それは、クラスの仲間や部活動の仲間、先生方、そして何より身近で支えてくれた家族の大きな支えのおかげです。しかしながら、出会った方たち以上に、出会ってもいない、顔も名前も知らない、数えきれないくらいの多くの方々の“見えない力”のおかげがあったのだと思います。

「ありがとう」の対義語は「あたりまえ」だと聞いたことがあります。いつもやってもらっていることに「あたりまえ」を感じてしまうと、「ありがとう」が消えていくといいます。私は、今まで、私を支えてくれている“見えない力”に「あたりまえ」を感じることはあっても、「ありがとう」と感じることはありませんでした。しかし、こうして振り返ってみると、私を支えてくれる“見えない力”に、心から、「ありがとう」と思えます。

出会った方々へ感謝を抱き、言葉や気持ちで伝えることはとても大切であり、実際にできます。しかし、出会ったこともないけれど、私を“見えない力”で支えてくださった方たちに、どうやって感謝の気持ちを表したらよいのでしょうか。

それは、私も見ず知らずの誰かの役に立つ人になるしかない、と思いました。それが、今まで私を“見えない力”で支えてくださった方々への恩返しになると思いました。

恥ずかしながら、私はまだ将来の明確な夢を抱けずにいます。しかし、私を支えてくれている数えきれないくらいの“見えない力”に感謝し、いつか私も、誰かを支える“見えない力”になりたい、と思いました。

《優秀賞》

自分らしく生きられる社会を

上柴中学校３年　村山（むらやま）　寧歩（しずほ）

みなさん、「多様性」という言葉を耳にしたことがありますか？誰もが一度は耳にしたことがある言葉だと思います。私もニュースや学校など様々な場面で耳にしたことがあります。多様性とはある集団の中に異なる特徴や特性を持った人が共に存在するという意味です。私も学校で多様性について学習したことがあります。現代の社会においてこの多様性を受け入れることはとても大切なことですが、私は多様性を受け入れようとする今の社会に時々違和感を持つことがあります。

ある日、ニュースでトランスジェンダーの女性用トイレ使用問題について報道されていました。内容は、性同一性障害と診断されたトランスジェンダーの女性がいました。そのことは会社も理解をしており女性用のトイレの使用を認めていました。しかし違和感を持つ女性社員もいたため、女性は他の女性社員と鉢合わせないよう利用者の少ないトイレを使うよう指示されていました。これについて女性が不当な扱いだと裁判を起こしました。確かにトランスジェンダーの女性からしたら不当な扱いを受けていると感じるでしょう。しかし、他の女性社員からしたら彼女が女性用トイレを利用するということは受け入れ難いと感じるでしょう。私もこの状況だったら女性用トイレを利用するのは控えてほしいと思ってしまいます。しかし判決は会社側に違法があるとして女性が勝訴したのでした。

最近は多様性を受け入れる社会を作ろうと様々なことが変化しています。確かに多様性を受け入れようと少数派の人たちの意見や要望を聞くことは大切なことだと思います。しかし、少数派の人ばかりに焦点を当てすぎて、多数派の意見や要望が無視されてしまうのはおかしいと思います。前のニュースの内容もそうですが、少数派の生きやすさを通す意見ばかりが通り、多数派が生きにくくなるという状況は多様性を受け入れているとは言えません。多数派の意見も少数派の意見も取り入れる、それこそが多様性を受け入れるということだと私は思います。そして多様性について、知り、受け入れるためにはもっと、様々な視点から物事を考え、正しい判断力を身に付ける必要があると考えます。それには教育やメディアなど様々な視点からの考えを発信することが効果的であると思います。

特に私は教育にもっと力を入れるべきだと考えます。私たち学生にとって学校は世界のすべてのような場所です。学校で教わることは知らないことばかりです。勉強だけではなく、人間関係や社会との関わり方など学校という教育の場を通して私たちは日々様々なことを学び経験します。そして大人になったときに持っている知識や偏見の概念は、学生時代に学んだこと、感じたことなどの経験により作られます。だから、将来の社会を支える私たちにとって教育の中で多様性についての正しい知識を学ぶことは、とても大切なことです。また最近よく聞く LGBT についても知っておくことは大切だと思います。自分の性について意識し始めるのは思春期の頃だそうです。性について知っておくことで自分がもしも LGBT に当てはまる場合だったとしても、周りに相談しやすい環境が作れるのではないかと思います。

世の中には色々な人がいて、皆が同じ考えを持つことなど絶対にありません。しかし同じ社会という中で生活していかなければいけない私たちは、多様性を受け入れ尊重する必要があります。特に今はグローバル化も進み国境を超えて人と人が関わることが多いです。きっと私たちが大人になる頃には今以上に国や言語、宗教などを超えて色々な考えや価値観を持つ人と接する機会が多くなります。将来自分が大人になったときに時代に置いていかれないよう、今から様々な人と交流し自分とは違う考えを知り、受け入れ、尊重し、正しい判断力を身に付けたいです。いつかみんなが自分らしく生きられる社会を実現できるよう、私はこれからも学び続けていきたいです。

《優良賞》

今を生きる

川本中学校３年　染野（そめの）　匠音（たくと）

私は、一人っ子として生活している。でも、正しくは、兄が４人いる５番目の末っ子であり、一人っ子でもある。これが、私の今だ。

私の母は、１番上の兄を流産したときに、子宮体癌が判明した。母になるか、父と２人での生活を送るかの決断を迫られたとき、父も母も、子どもを望んだ。度重なる手術の末、私を含めた兄弟たちの受精卵が作られた。抗リン脂質抗体症候群もあった母は、２度の流産の後に、２年間冷凍保存していた私を産んだ。この事実を知ったのは、私が５歳のときだった。「あのビルの２５階で２年間過ごしたんだよ。」と、母が教えてくれた。なんの話なのかさえ、そのときは分からなかった。教えなくてもよかったかもしれない。それでも、母は、兄弟のことも知ったうえで、私に命の大切さを教えるためにこの話をしたのだと今は思っている。

人の命は、とても強くてとてももろい。重い病気や重複障害があっても、生きたいと願っている人がいる一方で、自分から命の終わりを決める人もいる。命の選択は当事者にとっては全部正解で、そうでない周りの人間には、正しいとも間違いだとも言い切れない問題だからこそ、戸惑う。辛く、今が苦しい人に、頑張れとは私は言えない。それでも、末っ子長男、一人っ子の私は生きることの素晴らしさ、周りの人の笑顔を守ることの大切さをたくさんの人に伝えられる人でありたい。

令和４年度、自殺で亡くなった人は約２万２千人いるという。不遇な環境にあったり、親の愛情を十分に受けられていなかったりと理由は様々だ。それでも、私は自殺を最終手段にしないでほしいと伝えたい。どんな状況でも、生きていれば道は開いていけるはずだ。本当に辛い時には、その状況から離れていい。周りには必ず自分の味方でいてくれる人がいる。悩んでいる人に、そう言える大人になりたい。

私の夢は冒険家になることだ。たくさんの場所で、色々な生き物や植物に触れ、多くの人と出会いたいと思っている。中学校生活のなかで私の転機となったのは、立志の会だ。このとき、自分の座右の銘はなんなのか、将来、どんな大人になりたいのかを真剣に考える機会を持った。お金にもならない、ゴールも明確ではない、冒険家という夢を、父と母は「いいね」と言ってくれた。「やりたいと思うことに本気で向き合っている人間が１番かっこいい」とも言ってくれた。その言葉を聞いて、もしも冒険家にならなくても父と母は、私が選んだ道を必ず応援してくれる、どんな私でも、「いいね」と笑ってくれると確信できた。この確信が、私を深く安心させた。だからこそ私は、自分を大切に、周りの人の笑顔を大切にしていきたいと強く思った。

人の心は、気持ち次第で大きく揺らぐものだ。例えば、ちょっと手を伸ばせば届く夢も、マイナスな気持ちを持っていたら手放してしまうかもしれない。でも、普通の人が願っても叶えられないような夢でも、「大丈夫、自分ならできる」という気持ちさえ強ければ叶えられることもあると思う。そのくらい、気持ちと成果は連動しているんじゃないかということを最近、実感した。混合チームでしか試合経験のなかったサッカー部も、１年生の加入により単独チームとなった。３年生の最後の大会である学校総合体育大会では一勝することが出来た。この一勝のあと、私はいくつかの高校から声をかけていただくことができた。結果の残せないチームだからダメではなく、どんな試合をしたか、どれだけ３年間全力で練習を続けてきたか、結果ではなく、その過程が大事なんだと実感した。父と母の思い、３年間続けた部活、出会った同級生たちとの関係性。これから、また、いろいろ形を変えながら、私はいつも、自分も周りも笑顔でいられる人間関係と新たなことに挑戦する気持ちを忘れずに、今を生きたい。

《優良賞》

「双子として生きる」

東京成徳大学深谷中学校１年　山口（やまぐち）　花歩（かほ）

私は、2011 年 1 月 23 日、午後 11 時 12 分、体重 1363ｇ、39.6cm、複式帝王切開術、多胎、早産児、超低出生体重児として生まれてきた。私は、産まれる前も母のお腹の中でとても大変だった。そして産まれた時は「新生児仮死」で 25 分間生死をさまよった。生まれてすぐに、埼玉医科大学病院の NICU の保育機に入って 96 日目に退院をした。

この事は、私や双子の妹、両親が話さない限り人には分からないことだ。小学校低学年の頃の母の口癖は「小さく産んでごめんね。」だった。特に妹は、945ｇと１リットルの牛乳パックよりも軽く小さかった。だから母は、小さく生まれても、出来ることはこんなにあるんだと周りに知らせるかのように何にでも挑戦させた。逆上がりは２歳８ヶ月でできた。補助なし自転車には３歳で乗ることができた。縄跳びも「前回し飛び」は３歳２ヶ月で連続跳びができるようになっていた。幼稚園に入る前には、絵本は自分で読めるようになっていた。私は、できることが増えていくことが楽しくて、双子の妹とどっちが早くできるか競争しながら楽しんで取り組むことができていた。

でも、小学校に入学して友達から「双子っていいよね。」「双子がよかったな。」なんて言葉をシャワーのように浴びることになった。側からみれば双子はとても羨ましいもの。家族に同じ歳の子がいるなんて、楽しいに決まってる。でも、実際は、そうではなかった。家族は余り比べることはなかったが、友達にはよく比べられた。

「妹はこうなのに、あなたは違うよね。双子なのに。」

この、「双子なのに」という言葉が、鋭いナイフのように何度も私の心を傷つけてきた。妹がいないと、私はいたらいけないのか？と考えるようにさえなった。いつしか、私は「妹よりも優れた何かを手にしたい。」そう考えるようになった。テストでは、どの教科もほとんど 100 点を採った。体育の持久走も、妹よりも早く走った。児童会長にもなった。でも、私の心は晴れることはなかった。

小学校卒業が迫ったころ、６年間毎日登校を見守ってくれていた 88 歳のおばあさんと話すことがあった。「双子で産まれるなんて奇跡だね！」と言ってくれた。でも私は「いつでも比べられるから、いい思いはしてないんです。」と話すと「あなた自身が比べているからじゃないの？」と、いつもの笑顔で返してきた。

しまった、と思った。確かにそうだった。振り返ってみると、無意識のうちに比べていたのは自分だった。全く違う人間なのに、妹と自分を比べていた。「私は私」この事実が何よりも大切なんだと、重要なことに気が付いた。

今まで頑張ってこれたこと、学校で安心して過ごせたこと、初めてのことでも頑張れたこと、それは妹がいてくれたからだ。いつでも、誰よりも近くで見守っていてくれた妹がいたからだ。

「妹がいたから、私は強くなれた。」

「妹がいたから、私は自分を認めることができた。」

私たちは、双子として産まれてきた奇跡の二人なんだから。これからは、「双子でよかった。」と胸を張って言える自分になろうと思う。

《優良賞》

未来のために

深谷中学校３年　佐藤（さとう）　聖栄（きよえ）

私は吹奏楽部に所属し、サクソフォーンという楽器を担当していました。

１年生の頃、私は新潟県の中学校にいました。当時の私の目標は、自分の楽器を好きになるということでした。もともと「大変そうだから」という理由で吹奏楽部を希望していなかった私は、特に希望の楽器もなく、楽器体験の際余っていたサクソフォーンを第一希望にし、希望者が少なかったため、そのままサクソフォーンの担当になりました。ここまで全てなんとなくで物事を決めていた私でしたが、同じパートのとてもサクソフォーンが上手な先輩に憧れ、「上手くなりたい」「先輩みたいに自分の楽器を好きになりたい」と思うようになり、たくさん練習をしました。けれどなかなか周りには認めてもらえず、サクソフォーンが嫌いになりかけた頃、深谷中学校に転校することが決まってしまいました。

２ 年生になって、深谷中学校での生活が始まりました。顧問の先生も周りの友達もとても親切で優しかったため、吹奏楽部に仮入部をすることにしました。春休みという長い期間楽器から離れていたことから、初めは「またサクソフォーンが好きになれなかったらどうしよう」という気持ちがありました。仮入部の際に行った久しぶりの合奏で、楽器を吹くことや音が重なる瞬間の楽しさを感じることができ、吹奏楽部への入部を決めました。あのときの感情を私は一生忘れることはないと思います。夏のマーチングコンテストは今まで経験したことがなく、周りの２年生から一歩遅れてのスタートとなってしまいました。私のチームには３年生がおらず、２年生である私たちが１年生に教える必要があり大変でした。しかし、同じチームの２年生に助けてもらいながらなんとかやり遂げることができました。冬に行われたアンサンブルコンテストでは、同じパートの人との練習が楽しかったため、ずっとこのメンバーで吹いていたいとも思うようになりました。その後のソロコンテストでは全体練習の後、残って練習することは大変でしたが、日に日に磨かれていく自分の音が少し好きになりました。その頃、周りから少しずつ認められ、吹奏楽部の部長になることが決まりました。

３年生になり、私の目標は部員全員で県大会を目指すことになりました。近年、吹奏楽部は、座奏で県大会に進んだことが無かったため、私たちにとっては高い目標となりました。部長になって間もない頃は、部活のためや部員のために自分ができることが分からずにいましたが、自分が頑張ってさえいれば周りの人も少しずつやる気になってくれたり、協力してくれたりするということがわかってきました。暑い夏でしたが、みんなで支え合いながら練習をしたみんなの努力が実を結び、県大会出場という目標を叶えることができました。

これらの経験から、たとえ大きく環境が変わっても、周りに認められなくても、頑張る事を諦めてはいけないと知りました。それと同時に周りの人への感謝を忘れず、恩返しができるようにしたいと思うようになりました。現在は部活動を引退してしまいましたが、これからも、大好きなサクソフォーンを吹き続けます。

私は将来、サクソフォーンを活かす職業に就きたいと思っています。このようになんとなく始めた事が将来を左右することもあると思います。今あなたがもし諦めようとしていること、挑戦しようか迷っていることがあったら、ぜひ全力で取り組んでみてください。あなたの未来を創ることができるのは、今のあなたしかいないこと、忘れないでください！

《優良賞》

共に未来へ「言葉」で繋ぐ

藤沢中学校３年　高橋（たかはし）　歩花（ほのか）

言葉は美しい。これから先もそうあるべきだ。自分の心の内を一番伝えやすい。表情や身振り、手振りで伝えることも可能だが、誤解が生まれやすいと思う。だからこそ美しい言葉を使うべきだ。自由に自分を表現できる言葉を。

同じ意味であっても使う言葉によって話し手の個性は出ると考える。最近、「まじ」や「きもい」など、言葉を省略、短縮して使う機会が多くなった。実際、私も日常的に使用する。しかし、以前あった「日本語の美しさ」は消えてしまったように思う。便利で、無意識に出てしまうが、少し胸に引っかかった。簡略化された言葉を使うことによって、思いを詳しく表現できていないのではないか。１つの単語に込められた意味、思いが伝えたい相手に果たして届くのか。歴史あるこの日本語を、私たち若者が簡単に崩してよいのか。様々な疑問と葛藤する。こんな複雑な思いを一言で表すと「やばい」だ。やはり、本来あるべき姿の日本語の方が、感情を乗せやすく、細部まで伝わるため、好きだ。正しい日本語を使うべきである。

インターネットが普及し、体の一部のように常に近くにある今、簡略的な若者言葉が広まりやすくなっている。インターネットは必要不可欠である。だが、それによって若者言葉は大勢の人へ届き、使われるようになる。友達や家族とメッセージを送りあう際は、略語が多く使用される。だからこそ生じる問題があるはずだ。目を見て直接口で話すことが会話の基本であるのではないか。そんな基本を変えてしまっているインターネットとはもう少し向き合い方を改めてみたい。

若者言葉は、若者にとっては親しみがあり使いやすい言葉だ。しかし、高齢者の方はどうだろうか。使いづらいと感じる人もいると思う。どの年代にも通じる「美しい言葉」を使用するべきだ。幅広い年代で会話を楽しむためにも、私たち若者も言葉を意識しないといけないと考える。

言葉の力は絶大だ。心が打ちのめされた時、恋をした時、良いことがあった時などの、特別な気持ちに優しく寄り添ってくれる。大切な人からの励ましの言葉や曲の歌詞がそれに当てはまると考える。「自分はここにいてもいいんだ。」と人を前向きにさせる時や、命を投げ出そうとしている人にも届き、人生を繋げる盾になる時もある。つまり、言葉の力は、私たちが思うほど軽いものではない。重たく強く、明るい日射しのようなものだ。しかし、勘違いしている人は、簡単に「死ね」、「うざい」などの尖った言葉を使う。どうしてだろう。同じ地球上に住む仲間ではないか。相手の存在意義を奪うような言葉は、決して言ってはならない。言葉をナイフとして使ってはいけない。明るい日射しのように心を照らす、本来の「言葉」を取り戻したい。

中学生という若者の立場であるからこそ、美しい言葉を使い続け、周りの大切な人だけでなく、大勢の人に良い影響を与えられる人になりたい。そして一人では抱えきれない期待や不安などの大きな荷物によって悩んでいる人へ「言葉」を繋ぎ、支えられるような私へ近づいていきたい。

「共に未来へ」

それが私。中学生の主張だ。

《優良賞》

充実した生活を生むもの、それは夢を持つこと

幡羅中学校３年　大野（おおの）　提典（ていすけ）

皆さんに夢はありますか。今ならユーチューバーやゲームクリエイターが人気かもしれません。医師や弁護士、バスの運転手、お笑い芸人など、何になりたいか、皆さんにも漠然とした思いや興味があるかもしれません。私にも夢があります。そのおかげで今、学校に通うのがとても楽しく充実しています。そこで私にとっての「夢」の思いを皆さんに伝えようと思います。

私には、将来、中学校の英語教師になるという夢があります。それは素晴らしいお手本となる先生に出会えたことがきっかけです。２年生に進級した際、私のクラス担任となり、３年生となった今でも英語を担当していただいています。その先生はＳ先生と言います。

中学２年生の最も楽しみな行事に林間学校がありました。Ｓ先生は真剣にキャンプファイヤーの説明をする一方、本番では本気で踊り、歌い、小さな子供のように叫び、楽しんでいました。先生は、自ら全力で楽しむ見本となり、何にでも積極的に取り組む姿勢が必要なのだと、生徒たちに知らしめたのです。私もＳ先生のこの行動・信念に心を強く動かされました。

私が生徒会に立候補するとき、Ｓ先生は多くの助言と激励の言葉をくれました。ちょうど生徒会の担当にもなり、その後、たくさんの時間を一緒に過ごしました。自分たちで計画したプロジェクトを積極的に行い、それが成功したときはともに喜び、失敗したときは、ともに涙を流してくださいました。生徒に寄り添う思いが私の心に響き、それと同時に私はＳ先生、つまり教師という仕事そのものを尊敬し、憧れるようになりました。そこから、Ｓ先生を、一人の教師として、そして一人の人間として、私のお手本とすることに決めました。

Ｓ先生は、生徒を見守る目も持っています。私が友人とけんかをしてしまい、思い悩んでいた日、私の様子がおかしいことに気付きました。私の目を見て、「大野君、何があったの？」と心の内を察してくださいました。誰に対しても正直な気持ちを話すことは、中学生でもよほど気心の知れた仲でないとできません。しかし、Ｓ先生には全て正直に話すことができました。先生のアドバイスが、友人と仲直りする勇気を私に与えたのは言うまでもありません。教師とは素晴らしい相談相手だと改めて気付かされました。

Ｓ先生の英語の授業に、生徒全員がワクワクしています。積極的に英語をたくさん話す仕掛けがあり、私は以前より英語でコミュニケーションを取るのが好きになりました。休み時間や部活など、普段の学校生活で友人とコミュニケーションを取るのは当たり前ですが、授業を通して楽しくコミュニケーションすることはとても新鮮です。このような雰囲気の授業を受けることは、私や他の生徒にとってもとても良い経験になると思います。

教師になれたら、私も生徒の心に寄り添い、奮い立たせ、学校生活では素晴らしい時間を共に過ごし、さらには生徒たちの英語のスキルも上げます。将来、もしＳ先生やお世話になった先生方と一緒に働くことになったら、そんなことを考えたら、心躍らずにはいられません。Ｓ先生のような、賢く、優しく、熱心な教師になれるよう努力します。

身近なところに夢のかけらがあるかもしれません。それをもとに夢を膨らませられれば、毎日の生活がとても濃い素晴らしいものになります。「夢が目標になり、その目標に向かって努力できる」、そんな日々が待っています。私も教師になるという夢があるため、勉学に励むモチベーションが高くなりました。そして、今、中学校生活を前向きに過ごせています。このように夢を持って、自らの明るい未来のために努力することこそ、私達が今、中学生としてできることであるはずです。だからこそ、皆さんも夢を持ちましょう。

《優良賞》

貧困問題の背景にあるもの

明戸中学校３年　村田（むらた）　詩音（しのん）

先日、何気なくテレビを見ていた私は、ある場面に目を奪われてしまいました。そこには、やせ細り、自分では動けずに母親に抱かれている幼い子どもの姿がありました。彼女の泣き声は、聞き取れないような弱々しいものでした。

現在、世界では 7 億 6700 万人、つまり 10 人に 1 人が 1 日当たり 1.9 ドル（約 270 円）以下のお金で極度に貧しい生活を送っています。しかも、そのうちの約半数、3 億 8500 万人が子どもであり、世界中の子どもたちの 5 人に 1 人が、そのような貧困生活を強いられているのです。この事実を知った私は、じっとしてはいられないような気持ちになりました。

そもそも、なぜこのような深刻な貧困問題が起こるのでしょうか。収入がない、災害や紛争に見まわれる、食糧難、など様々な要因があると思われます。私が強く考えるのは、「教育問題」です。教育を受けられないと知識が身につかずに、仕事を選ぶことができず、または仕事に就くことさえできずに収入が得られなくなります。「それなら教育を受ければ良い。」と言う人もいるでしょう。しかし、そんな単純な問題ではありません。世界には、その日一日を生き延びるのに精一杯で、子どもに教育を受けさせる余裕がないという人々も少なくありません。教育は必要ない、という地域さえあります。

貧困とは、食料、仕事、保健医療、飲料水、住居、エネルギーなど、最も基本的なもののサービスを手に入れられない状態のことです。極度の、あるいは絶対的な貧困とは、生きていくうえで最低限必要な食料さえ確保できず、人として尊厳ある社会生活を営むことが困難な状態を指します。

今、この時も貧困に苦しんでいる人達のことを考えると、「教育の大切さ」を訴える私の考えは、現実味のない夢のような話なのかもしれません。しかし、ただ食料や水を配給して限りある日数を援助するだけでは、根本的な問題解決にはならないと思うのです。

では、いったいどうすればいいのでしょう。複雑で難しいことはできなくても、まずは、やはり、他人事ではなく、「自分事」として捉えるべきだと思います。私たちは９年間の義務教育を受けることができます。毎日おいしい給食を食べ、友達とおしゃべりするような生活を当たり前だと思っていますが、世界に目を向ければそれは決して当たり前のことではなく、貧困は世界中の問題となっています。

実は、驚くことに、私たちの身近なところにまで「貧困問題」は迫ってきているのです。日本の貧困率は、約１５％とＧ7 の中ではワースト２位となっており、６人に１人が貧困に直面しています。その背景には、「少子高齢化」の問題があります。子どもの貧困率も上昇傾向にあり、７人に１人の子どもが貧困状態にあるとされていて、現在は４２ヶ国中２１番目に高い数値となっています。

これまで述べてきたように、「貧困問題」の裏には複雑なたくさんの課題があることがわかりました。私たちに何ができるのか、という疑問に対する単純な答はありません。私たちはまだ非力な中学生です。しかし、これからの未来を生きていく私たちだからこそ、今、真剣に考えなければならないのだと思うのです。

私は、大きなことはできないけれど、今、自分が置かれている、安心して教育を受けられる幸せをしっかりと受け止めて、目の前にある、やるべきことを一つ一つ丁寧に、積み上げていこうと思います。勉強が面倒くさくなったり、嫌なことがあるとなげやりになったりすることは、これからもたくさんあると思うけれど、今の勉強がいつかどこかで必ず役に立つのだと心に刻んで、苦手な数学も学習時間を増やして、まずは第一志望への合格を目指します。将来の夢は内緒ですが、広い視野で世界や目の前の問題に目を向けて、積極的に動けるような人になりたいです。

《優良賞》

「個性」の大切さ

豊里中学校２年　石川（いしかわ）　陽彩（ひいろ）

私は、読書が大好きです。そのことを人に言うと、よく「えらいね。」と言われます。褒められるというのは普通、「嬉しい」ことです。ですが私は、そう言われるたびにモヤモヤしてしまいます。

人は、それぞれ「個性」を持っています。絵を描くのが好きな人、動物が好きな人、体を動かすのが好きな人…。好きなことが同じ人はいても、自分と全く同じ人はこの世にいないと私は思っています。自分には自分の、他人には他人の考えがあると思います。

私にはこんな体験があります。友達と誕生日プレゼントについて話をしていた時のことです。何をもらおうかという話になり、皆が文房具や洋服などと答える中、私は一人「本」と答えました。私が本好きなのは皆知っていたので、驚きつつも「すごい」や「えらい」と口々に私を褒めました。私は曖昧に笑って返しつつも、なぜこんなにも褒められなければならないのだろうと、一人別の場所に立っているような感覚をおぼえました。

『本を読むのは「えらい」のか。読書が好きなのは「すごい」のか。絵がうまい人やスポーツが得意な人に「すごい」はわかる。勉強していて「えらい」もわかる。けれど、なぜ本を読んでいるだけで、読書が好きなだけで「えらい」と言われるのか。』私にはわかりませんでした。

「自分は本が苦手。だから、本が好きなのはえらいと思う。」と考えた人もいるかもしれません。でも、こう考えてみてください。あなたは、自分の好きなこと、例えばゲームなどをしているとします。そこへ友達がやってきて、「えらい」とあなたに言いました。どうですか。自分が好きでやっているのに、なぜ褒められるのだろうと思いませんか。私が感じているのは、そんな気持ちです。

人には人の世界があります。私とあなたは違う人間です。仮に興味や好きなことなど似ているところはあっても、別の人間です。あなたはあなたしかいません。私も私しかいません。誰も代わりを務めることなどできないのです。

興味のあることや好きなことがあれば、そう感じることもなくなるのではないかと思う人もいるでしょう。ですが、同じことが好きでも、人によって意見や感想をどのように思うかは多少の違いが出てきます。思うことや考えることが全く同じ人はなかなかいるものではありません。「人には人の個性がある。世界がある。感じることが、自分と同じとは限らない。」この考えを頭に入れておかないと、トラブルやささいな争いが起こりやすくなってしまいます。

人と人とが完全に分かり合えることなど難しいのかもしれません。しかし、分かろうと思うこと、相手に歩み寄る努力をすることはできます。そう思ってきたからこそ、人は協力し合い、ここまで文明を築き上げることができたのではないかと私は考えます。

「一人一人の違いを理解し、個性を認め合う」そんな世界にできれば、人はいつか分かり合える世界を本当の意味での平和な世界を作ることができるのではないでしょうか。

《優良賞》

スポーツは人の心を動かす

岡部中学校３年　吉岡（よしおか）　武蔵（むさし）

皆さんはスポーツを見て、感動した、悲しんだ、笑顔になったことはありますか。

2023 年は多くのスポーツで、世界大会が行われました。野球、女子サッカー、陸上、バスケットボール、ラグビー、バレーボール。日本中がその結果に一喜一憂しました。日本代表の勝敗によって、日本中が喜んだり、悲しんだりする様子は、スポーツは人々の心を動かすということを改めて感じさせてくれました。特に昨年行われたサッカーW 杯の盛り上がりは、一年経った今でも印象に残っています。「三苫の 1mm」という言葉が生まれたのもこの大会でした。私はこの W 杯からたくさんの感動や勇気をもらい、今まで目標としていた「プロサッカー選手になる」という夢をより一層強く抱くようになりました。

プロサッカー選手という職業を目指すようになったきっかけは、私が五歳の頃です。私は五歳からサッカーを始め、練習や試合、たくさんの経験を繰り返していくうちにサッカーがとても好きになりました。はじめはうまくいかなかったものの、コーチや監督の助言や、家族や周囲の方々の励ましもあり、サッカーの楽しさを知ることができました。私はサッカーの楽しさを教えてくれたコーチや監督、そしてつらい時や苦しい時に励ましてくれたり、私がサッカーを続けるために、様々な面で支えてくれた家族や周囲の方々に恩返しをしたいと思い、プロサッカー選手になりたいと思いました。

中学生の三年間はクラブチームに所属していました。私が在籍するクラブチームでの目標は、「全国大会出場」でした。私たちはチームメイトと切磋琢磨し、目標達成に向けて努力を続けてきましたが、「全国大会出場」の目標を叶えることはできませんでした。しかし、「関東大会出場」という私の中で大きな成績を残すことができました。目標達成に向けて練習を続ける中で、チームメイトと意見が衝突することもありました。お互いが本気だからこそ、お互い目標を達成したいからこそ、ぶつかってしまう場面もありました。しかし、関東大会出場を決めたその時、今まで共に乗り越えてきたチームメイトと喜びを分かち合うことができて、私の心は熱くなりました。結果として「全国出場」という目標は達成することはできなかったけれど、サッカーを通して、礼儀や感謝の気持ち、仲間の大切さなど多くのことを学びました。そして何より、スポーツは人の心を動かすということを知ることができました。

これから、自分の夢に向かっていろいろな経験などをしていく中で、失敗や挫折などがあると思います。そこで失敗したからといって夢をあきらめたりすることは絶対したくありません。昨年の W 杯で起こった「三苫の 1 mm」も、三苫選手の執念のプレーでした。格上の相手であっても、あきらめずに立ち向かう。その気持ちがあのプレーを生み、逆転の一点につながったのだと思います。そしてそんな日本代表の姿に、私の心が動いたのだと思います。スポーツは人の心を動かす。それはきっとどんな逆境でもあきらめないその姿が人の心を動かすのだと思います、私は、たくさん失敗していいと思います。大切なのはあきらめないことです。「失敗は成功のもと」のように、失敗すれば必ず何かを得ることができます。なので、これからもたくさん失敗しても、あきらめず夢を実現できるようにしていきたいです。その姿が誰かの心を動かすのだと信じて。